生活諸側面からみた孤立高齢者の諸類型と孤独感

～ 中山間と大都市における一人暮らし高齢者調査より ～

日本福祉大学
地域ケア研究推進センター

斉藤 雅茂、平野 隆之、冷水 豊

1. 目 的

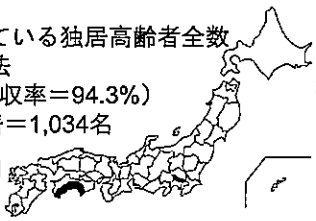
- 孤立状態に該当する高齢者のなかでの多様性を踏まえて，生活諸側面からみた孤立高齢者の類型化を試みること
- 析出された孤立高齢者の諸類型（孤立クラスター）と孤独感との関連を明らかにすること

2. 方 法

■ 調査概要

ー中山間〔高知県下３町村〕

- □ 2009年10～11月
- □ 市町村社協で把握している独居高齢者全数
- □ 民生委員による留置法
- □ 回　答＝1,132名（回収率＝94.3%）
  ---> 調査時点で独居＝1,034名



ー大都市〔東京都板橋区〕

- □ 2007年9～11月
- □ 選挙人名簿から系統抽出法によって抽出
- □ 調査員による訪問面接法
- □ 回　答＝1,992名（回収率＝56.9%）
  ---> 調査時点で独居＝1,391名

■ 使用した変数

孤　　立：別居家族・親戚および友人・近所の人との交流頻度（対面／非対面接触）
孤立＝週に１回未満（n=348 / 14.9%）

生活諸側面：視力・聴力・歩行障害の有無，主観的健康度，居室の狭さ，日当たりの悪さ，風通しの悪さ，外出頻度（週に１回未満），年間所得（中山間：120万円未満，大都市：180万円未満）

孤 独 感：Russell et al. (1980)の改訂版UCLA孤独感スケールのうち7項目．α=.944

■ 解析方法

ー生活諸側面からみた孤立高齢者の類型化
クラスター分析（Ward法，平方ユークリッド距離）
あらかじめクラスター数を３～６の間で設定し、最も解釈可能な分類を採用した。

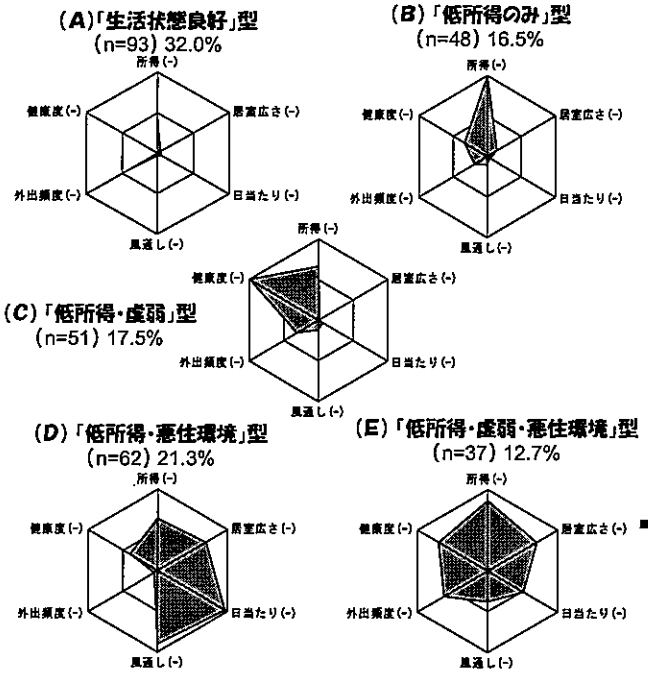
ー孤立クラスターと基本属性・孤独感との関連
χ2検定および一元配置分散分析

3. 孤立高齢者の５類型 ～生活状態良好な孤立は３割程度～

ー孤立高齢者は，低所得であるか否かで大きく分かれ，低所得者のなかで，身体障害や閉じこもり傾向にある群(c)と住環境が良くない群(d)，その両者に該当する群(e)，両者とも該当しない群(b)に分類された．

ー地域間で孤立クラスターの分布が異なり、中山間の孤立高齢者は「低所得・虚弱・悪住環境」が比較的多くなっていた．

<クラスター分析の結果>



<地域間での孤立クラスター分布の相違>

	孤立(A)	孤立(B)	孤立(C)	孤立(D	孤立(E)	合 計
中山間 (n=86)	27.9	14.0	11.6	15.1	**31.4**	100.0
大都市 (n=205)	**33.7**	**17.6**	**20.0**	**23.9**	4.9	100.0

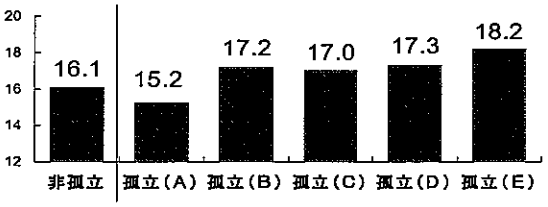
値は%　　χ^2=39.3***(df=4)

4. 生活上の問題を複数抱えた孤立高齢者ほど孤独感が強い

ー孤立高齢者の間でも孤独感に有意な差があり、「低所得・虚弱・悪住環境(孤立E)」に該当する孤立高齢者が最も孤独感が強い。

ー他方で「生活状態良好(孤立A)」に該当する孤立高齢者は，非孤立と比較しても孤独感が高くはなかった．

<孤立クラスターと孤独感との関連>



$F(4, 270) = 2.96$ *

5. 考　　察

- 孤立傾向にある高齢者の生活状況は一様ではなく，一定の多様性が認められた．とくに孤立のみに該当する高齢者は比較的少なく，**多くの孤立高齢者は，低所得や劣悪な住環境，健康面の問題を同時に抱えていた．**
- 「孤立」と「孤独」が密接に関連していることは既に明らかにされているが、**生活上の諸問題を同時に抱えた孤立高齢者ほど孤独感が強い**傾向にあり，孤立状態の多様性に対応した援助の必要性が改めて確認された